

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(7) : 異形の織物3 : 枝状の織物

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	276
ページ	67-69
発行年	2004-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5219

縦横無尽

タテとヨコの色とかたち のファイールドワーク

吉本 忍

異形の織物3 枝状の織物

染織の宝庫・アンデス

南米大陸の西岸沿いに南北約9000キロにわたって連なる脊梁山脈、アンデスは、世界有数のテキスタイルの宝庫である。したがって、アンデスは、わたしにとってきわめて重要な調査対象地域のひとつであったが、長年にわたって他地域での調査に追われていたことから、アンデスに行く機会はなかなか巡ってこなかった。

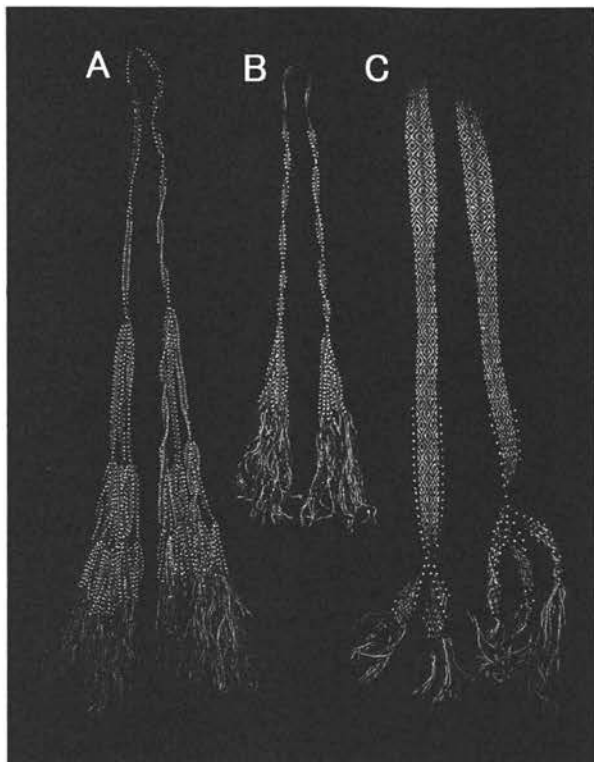


写真1 枝状織物

A、B—髪飾りや帽子の飾り紐ともちいられる枝状織物
C—乳幼児のカゴをしぼる飾り紐

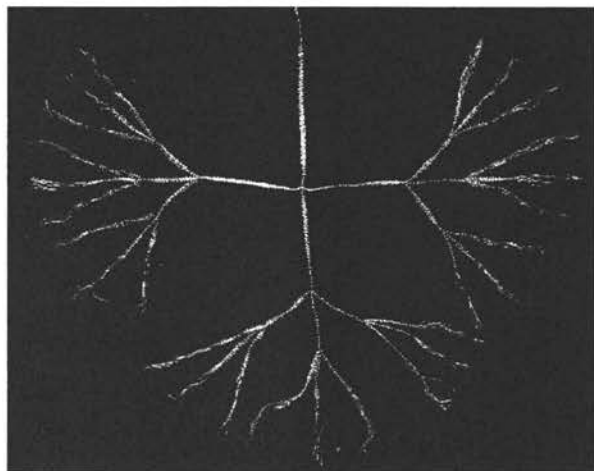


写真2 枝状織物（写真1A）の枝状部分を広げた状態

わたしははじめて南米大陸に足を踏み入れたのは1999年のことであったが、その時点で南米は南極大陸以外で、わたしがいまだ行ったことのない唯一の大陸となっていた。しかし、その後には、2002年までのあいだに、南米で通算4回と堰を切ったようにフィールドワークをおこなってきた。そして、今年も夏のコーカサスでの調査をはさんで、春と秋に南米へ行く計画を進めている。さて、今回は異形の織物の3回目として南

米のペルー・アンデスで織られている枝状の織物を紹介する。

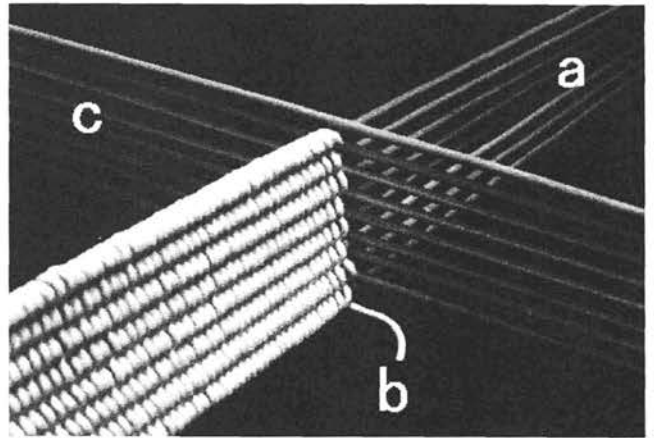
わたしが枝状の織物を知ったのは、2001年にアマゾンでの調査を終えてクスコに戻り、帰国の準備をしているときのことであった。「セニョール・ヨシモトはありとあらゆる織物に興味を示しているようだから」ということで現地の知人から見せられた織物が枝状の織物であったのだが、最初は単に枝状に縫い合わせた織物かと思った。しかし、手にとってよく見てみると、どこにも縫い合わせた形跡がないとわかり、このときも先月号で紹介した丸紐状の織物と出会ったときと同様に、驚きのあまり大きな声をあげてしまった。またしても、異形の織物の出現である。できることならすぐにも機織りの現場に飛んで行きたかったが、このときは時間切れでどうすることもできず、後ろ髪を引かれる思いで帰国の途についた。しかし、幸いなことに翌2002年2月に短期間ではあったが再度アンデスに行く機会を得て、ようやくにして枝状織物の調査をすることとなった。

枝分かれした織物

枝状の織物は、ペルーのクスコ周辺のピトゥマルカやピサクなどのケチュア人の村々で織られている。この織物は、紐状の織物の両端に近いところが枝分かれ状になっており、ケチュア語でワタナと呼ばれている。織り幅は4〜10ミリ程度の比較的細いものと、3センチ前後の比較的広いものがある。そして、細いものは女性の髪飾りや帽子の飾り紐、太いものは乳幼児を寝かせておくカゴをしぼる飾り紐として使われている。なお、これらの枝状織物のうちには、織り耳部分にビーズを

写真3 交叉状整経 (イメージ写真)

- a 一枝状織物の幹に相当する部分のタテ糸
- b 一枝状織物の幹に相当する部分のヨコ糸
- c あらたに交叉状に整経されたタテ糸



織り込んだものも少なからず見いだされる。

枝状の織物はどのようにして織られているのか。2001年にクスコで枝状織物を見せられたときには、そのことを製作現場で確認することはできなかったものの、織物が枝分かれ状になった部分を見た段階で、その製作技術の要点は理解することができた。その要点とは交叉状の整経である。写真3に示したように、機織りの途中で織り残されているタテ糸のあいだに別のタテ糸を交叉させて整経をおこない、その後交叉させた部分を基点として、織り残したタテ糸や、あらたに交叉状に整経したタテ糸のあいだにヨコ糸を織り込んでいけば、枝状の織物となるわけである。そして、2002年の調査では、このときの理解が間違っていないことを確認するこ



写真4 交叉状の整経 (ペルー、ピトゥマルカ：2002年)

ととなった。

枝状の織物の調査は、クスコの南東約100キロの地点にあるピトゥマルカ村でおこなった。じつは、この村は1999年と2000年にも訪ねたことのある村で、来月号で紹介する鬘状の織物もこの村で調査をおこなっている。そのときに女性たちの髪飾りや帽子の飾り紐を注意深く見ていけば、枝状織物の調査もすませていたはずのところを、2002年には、その調査のためだけに日本から遠路はるばる出なおすことになったわけである。

組織と道具

ピトゥマルカ村では織幅が約1センチの髪飾り用枝状織物の製作工程を観察調査した。これまでにわたしが見てきた枝状織物は、い

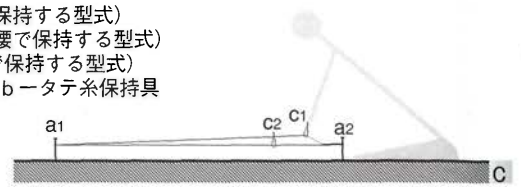
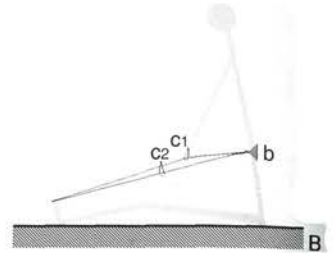
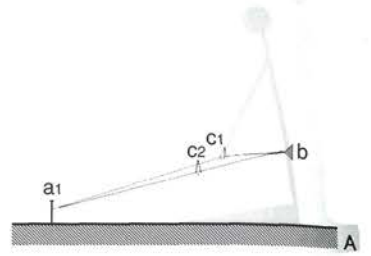
ずれも地組織が平織の変化組織であるタテ畝組織の織物で、一般にタテ縞を併用した幾何学的な模様がタテ糸浮織技法によってあらわされている。このような枝状織物を織るためのタテ糸の整経方式は、他の異形の織物と同様に平整経式であり、タテ糸は、まず、2本の釘を地面に打ち込み、8の字状にタテ糸をかけたわたして整経をおこなう。そしてその後、奇数列のタテ糸と偶数列のタテ糸を、それぞれ綜統糸ですくい取って二つの糸綜統(輪状綜統)をつくってから、機織りがはじまる。ただし、この最初の整経は枝状織物の幹となるタテ糸の整経であり、枝状の織物ができあがるまでには、こうした整経が枝分かれする部分で繰り返しおこなわれ、そのつど糸綜統もつくられる。

織りをおこなうために使われる道具は簡単なもので、タテ糸保持具、開口具、開口補助具があるにすぎない。このうちタテ糸保持具にはタテ糸を直接保持するための道具として釘、あるいは腰紐があり、開口具である二つの糸綜統は地綜統として機能している。また、開口補助具としては、タテ糸浮織技法によって模様を織り出すために、必要に応じて針がタテ糸をすくいとるために使われている。なお、わたしが調査した比較的細幅の枝状織物の機織りには、緯入具や緯打具は使われておらず、ヨコ糸は指先でつまんでタテ糸のあいだに通し、打ち込みも指でおこなわれていた。以上のような道具を使っておこなわれる枝状織物の機織りは、単純ではあるがきわめて変則的である。このことを織機構造の違いによって説明すると、図のように腰機 (Back tension loom) として機能している状態が2型式と、地機 (ground loom) として機能し

写真6 枝状織物を髪に編み込む
(ペルー、ピトゥマルカ：2002年)



写真7 髪飾りとしてもちいられている枝状織物
(ペルー、ピトゥマルカ：2002年)



枝状織物の織機構造

- A—腰機型式（タテ糸を釘と腰で保持する型式）
- B—腰機型式（タテ糸を足の指と腰で保持する型式）
- C—地機型式（タテ糸を2本の釘で保持する型式）
- a1～a2—タテ糸保持具（釘）、b—タテ糸保持具（腰紐）、c1～c2—糸綜統

ている状態が1型式との合計3型式があるということになる。枝状の織物をそれらのいづれによって織るのかということは、織り手の自由裁量であるが、一般に整経後の綜統づくりにつづく織りはじめの段階では、整経のために使用した2本の釘を、そのまま糸系保持具として転用し、2本の釘でタテ糸を保持するという地機型式の織機構造で織り進むことが多く、その後は、タテ糸の先端部を釘、あるいは織り手の足の指で保持し、手元部分を腰紐によって保持するという腰機型式の織機構造で織ることが多いようである。

さて、枝状織物の機織りでは、一般に紐状の織物を織りはじめから10センチ程度織り進



写真5 枝状部分の機織り（ペルー、ピトゥマルカ：2002年）

- ① 幹となる部分を10センチ程度織り進んだ段階で織り作業を中断する。
 - ② 織りはじめの部分とタテ糸の先端部を地面に打ち込んだ2本の棒にかけて直線状に張りわたして固定する。
 - ③ 枝分かれする部分の両側に2本の釘を打ち込み、織り途中のタテ糸のあいだにあらたなタテ糸をくぐらせながら、2本の釘に8の字状にタテ糸をかけたわたして交叉状の整経をおこなう（写真4）。
 - ④ 交叉状の整経を終えたタテ糸の両側の偶数列と奇数列のタテ糸を、それぞれ綜統糸ですくつて糸綜統を2つずつつくる。
 - ⑤ 幹となる紐状織物の機織りを再開し、若干（2～3センチ）織り進む。このことよつて交叉状に整経されたタテ糸の交叉部分が幹となる紐状織物のあいだに織り込まれる。
 - ⑥ あらたに整経した枝状部分の一方をタテ糸の交叉部分から先端部に向けて織る。
 - ⑦ あらたに整経した枝状部分のもう一方をタテ糸の交叉部分から先端部に向けて織る。
 - ⑧ 幹となる紐状織物の織りを再開する。
- 以上が、枝状織物の枝分かれ状の織り作業の基本であり、枝状織物ができあがるまでには、枝分かれ状となる部分で、そのつど右記の作業が繰り返されることとなる。

（国立民族学博物館 民族文化研究部 教授）

よしひと・しのぶ